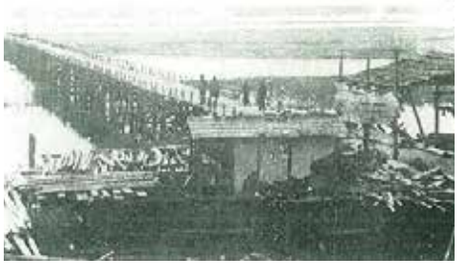
吉野川 橋ものがたり
第1回 **吉野川橋**

平成30年に満90歳を迎えた吉野川橋。昔も今も、これからも吉野川を象徴する橋です



大正７年頃の古川橋。木製で洪水のたびに流されていました。「古川賃取り橋」とも呼ばれていました
（写真集「吉野川百年史資料編」）

徳島県は吉野川をはじめ大小約500の川が流れる水の都です。その川には多種多様な橋が架かっており、なかでも38の永久抜水橋、８の潜水橋が架かる吉野川は、さながら橋の博物館！

特に、古くから県民に愛され、親しまれている吉野川橋。広大な河口に架かるワーレントラスの構造美、なだらかな眉山の稜線――徳島の原風景と言っても過言ではないでしょう。その吉野川橋が、平成30年12月18日、満90歳を迎えました。

吉野川橋が架けられるまで、住民は幅１kmにも及ぶ河口を渡し船で行き来していました。明治19年（１８８６）、板野郡川内町（現在の徳島市川内町）の豊川仲太郎氏が私財で木造の「古川橋」を架けました。しかし、木造の橋は洪水のたびに流されてしまい、橋の維持・管理には多額の費用が必要であったため、通行の際に渡し賃を徴収していました。

四国三郎の異名を持つ暴れ川に近代的な鉄橋を架けることは、先人たちの悲願でした。大正14年（１９２５）11月に着工し、3年2か月という年月をかけて昭和3年（１９２８）12月18日、吉野川橋が完成しました。設計者は日本を代表する橋梁技術者・増田 淳。長さ１０７１ｍ、17連のアーチを持つ曲弦鋼ワーレントラス橋は、当時東洋一の長さを誇り、昭和2年の三好橋、3年の穴吹橋とともに徳島県初の本格的な永久抜水橋でした。技術の粋を集めた東洋一の橋に、人々はどれほど歓喜したことでしょう。開通を祝う「渡り初め」には4万人もの人々が押し寄せ、祝賀の飛行機が飛び、阿波おどりが披露されるなど、それはそれは盛大な式典でした。

「古川渡し」は河口から約４kmにあり、板野郡古川村と名東郡上助任村を結んでいました。渡し跡の石碑が北岸に立っています

↑渡り初めの様子。橋が長いため自動車に乗って渡りました（写真集「吉野川百年史資料編」）

←夕陽に浮かぶシルエットが美しい。戦禍や南海地震にも耐え、建設当時の姿をそのまま保っています

それから90年――。県下の大動脈として人々の暮らしや徳島県の経済発展を支え続けてきた吉野川橋。老朽化や交通量の増加に伴う補修・補強工事はもちろん、南海トラフ大地震への対策も施され、100歳に向けての備えも万全です。美しい姿を次の世代に守り伝えていきたいですね。

さまざまな角度からアプローチ まるごと吉野川『魅力再発見』講座

古くから吉野川との関わりによって育まれてきた文化・歴史・環境をテーマに、今年度も「まるごと吉野川〝魅力再発見〟講座」を開催しました。

第1回講座　吉野川と阿波藍、阿波人形浄瑠璃のつながり

日時／平成30年8月4日（土）14時～15時30分
場所／徳島県立阿波十郎兵衛屋敷
講師／佐藤憲治氏（徳島県立阿波十郎兵衛屋敷館長）

阿波藍の隆盛により、吉野川流域では阿波おどり、阿波人形浄瑠璃などの文化・芸能が栄えました。『傾城阿波鳴門』を鑑賞した後、佐藤館長による講演を拝聴。阿波人形浄瑠璃や阿波藍、阿波の食など、吉野川の育んだ文化や産業をまるごと体験できる「徳島じょうるりクルーズ」をはじめ、吉野川の魅力を発信する意欲的な取り組みについても語ってくれました。

母娘の愛情が涙を誘う「巡礼歌の段」を鑑賞

第2回講座　『四国三郎・吉野川』の水利用を学ぼう！

日時／平成30年8月29日（水）13時30分～16時

夏休み恒例となった子ども対象のバスツアー。今年は、徳島市水道局・第十浄水場、大鵬薬品工業㈱徳島工場の各所で水利用について学習しました。第十浄水場では水質検査室や浄水施設を見学し、私たちが普段飲んでいる水がどのように作られているのかを学びました。大鵬薬品工業㈱徳島工場では環境に配慮した施設などを見学。水の大切さを再認識した一日でした。

第十浄水場の浄水施設